



長崎県・五島列島 製塩業「やがため」川口踊さん(32)

この人が手がけているのなら、きっといいものができるに違いない。少し言葉を交わすだけで、そう感じさせる人がいる。長崎県の離島で塩づくりを手掛ける川口踊さん(32)も、そんな一人だ。「塩づくりって、まるで子育てみたいなんです」と話す姿からは、塩への愛情やあふれる思いが伝わってくる。(インタビュアー／竹内章)

親が子を育て愛するように

塩づくりは、人が子供を育てるときのように、なかなかうまくいかないことがあり、逆に想像を上回ることもある。川口さんは、親が我が子を育てるように塩を育て、親が子を愛するように塩を愛する。

「塩が時間をかけてきれいな結晶に育っていくのを見ていると、子供と似ているな、と感じることがあります。いつの間にか大きくなったね、立派になったね、って子供に対して思うこと、ありますよね？ それと同じような気持ちです」

塩を売るときは娘を嫁がせる気分

おいしい塩、おいしくない塩、という風に塩を見ない。人と同じように、塩にもそれぞれ個性がある。塩を買った人のニーズと、買われた塩がマッチするかどうか。それだけのことだと考える。

「どんな塩にも食材との相性があります。使い方ひとつで良くもなり、悪くもなります。塩を売るときは、まるで娘を嫁がせるような気持ちになるんです。大切にしてもらっているかな、喜ばれているかな、出戻ってくるなよ、と考えたりもします」

あいまいな言葉でごまかしたくない

どこかから借りてきたような響きのいい言葉や、いかにも作ったようなキャッチフレーズで塩を語らない。自分が作った塩に責任を持ちたい、という思いがある。

「例えば『真心こめて作っています』『塩と会話しながら……』といった表現は、好きではありません。それらしく聞こえますが、説得力が感じられないからです。塩のことをそれらしい言葉で飾ったり、あいまいな表現でごまかしたりしたくないんです」



塩の世界に入れないかな

釜の中で塩が結晶する様子を観たくて、水中をのぞく子供向けの「ハコメガネ」を買った。塩づくりに夢中になる姿は、まるで子供のようだ。

「塩の世界に入れないかな、とハコメガネを買いました。結晶が沈む瞬間や、釜の底にどう積もっていくのかを見たくて。次は、結晶を見る顕微鏡がほしいです。塩づくりの苦勞？ 楽しさしかないですね」

塩の資格を取得

2017年夏、夫と一緒に日本ソルトコーディネーター協会（沖縄県）の認定資格「ジュニアソルトコーディネーター」を、長崎県内で初めて取得した。さらなる高みを目指している。

「資格がなくても塩は作れますし、実際作ってきました。でも、きちんとした知識もなく、塩を作って売るのがいやでした。お客さんにも、自分に対しても説得力がない。安心感がほしかったんです」

安心安全 欲しかった確証

塩の原料となる海水から不純物を取り除く装置を2017年秋、導入した。作業工程に機械を入れることを懸念する声もあった。自然なものでつくった塩、というイメージが崩れるのではないかと。

「離島の海水が原料なんだから、何もしなくてもきれいでしょ、とも言われます。ですが、そんなぼんやりとした印象だけでは説得力に欠けると思いました。うちの塩は本当に安心安全を追い求めています、という確証・根拠がほしかったんです」